



ORIGINAL NOVEL

開演時間
19時00分

■ 8月12日 ラボ

「ねえ岡部。これより一回り小さいニッパーない？ このサイズ使いにくいんだけど——」

基板とにらめっこしていた紅莉栖がそう言って顔を上げるも、そこに岡部の姿は見当たらなかった。今、ラボにいるのは紅莉栖だけだ。

「そっか、部品買いに行かせたんだっけ。いるとウザいけど、いないと不便なのよね、あいつ」
流れるように暴言を吐きながら、紅莉栖は椅子から立ち上がり、両腕をうーんと伸ばした。朝からずっと同じ格好をしてたからか、腕から肩にかけてごわごわだ。

白衣の上から肩を揉みながら、開発室——未来ガジェット研究所の、カーテンで仕切られた奥のエリアのこと——を見回した。

開発室は三方の壁に棚が取り付けられていて、過去に作った未来ガジェットやら、橋田のエロゲーやら、他にも様々な物が押し込まれていた。一回り小さいニッパーだって、どこかにあるかもしれない。

「ふむん。探すか。どうせ帰って来るまでヒマだし」

さつきまではまゆりと橋田もいたのだが、今は二人とも外出している。コミマ用のコスプレ衣装を間に合わせるために昨日から泊まりだしたまゆりは、急遽足りない布を買いに出かけていた。橋田は涼しさと癒やしを求めてメイクイーン+ニャン2に旅立った。

意外にもラボに一人つきりになるのは珍しく、微妙に手持ち無沙汰で。岡部が帰ってくるまで休憩するという気にはなれなかった。

「よし」

セルフ肩揉みを打ち切り、ニッパー探索ミッションに移行する。見つかったら、メイン基板の配線作業を再開しよう。

紅莉栖は机の上に置かれた基板を眺める。ICチップと抵抗とコンデンサが手作業でハンダ付けされたそれは、電話レンジ(仮)を安定動作させるための改良装置だった。

いや、正確には、作っているのは電話レンジ(仮)ではなく――

「――作っているのは、タイムリープマシン」

一昨日、最後まで謎だったリフターの正体が判明したことで、なぜ電話レンジ(仮)が過去にメールを送信できるのかが明らかになった。同時に、この機構を応用すれば人の記憶を過

去に送り込むタイムリープマシンが実現できる可能性が提示された。そしてラボの創設者である岡部倫太郎の決定により、タイムリープマシンを開発すると決まった。

開発は大詰めに迎えていた。実質的な作業者は紅莉栖と橋田だ。紅莉栖は機械にバリバリ詳しいというわけではないので、自分でできる所までは進めて、残りを橋田に頼んでいる。ちなみに岡部の主な役目は買い出しで、まゆりはコミマ用の衣装を作っている。

「あと、少し」

まゆりのコスプレ衣装とどっちが先にできるかは微妙なもの、このままトラブルがなければ予定通り明日完成する。これを本当に作るべきかどうかについて紅莉栖はまだ逡巡していたけれど、とりあえず完成してから考えると決めていた。今はそれでいい。

振り切るように基板から目を剥がし、床を這うコードをまたいで棚の前に立った。そして、ニッパがないか一段ずつ見ていく。

「しかし、見れば見るほどガラクタの山ね……」

棚には使わなくなったPCやゲーム機、それに分解された家電などが雑多に並んでいて、それらの隙間を埋めるように、エロゲーの箱や大学の教科書が差し込まれていた。紅莉栖は、

その教科書の影にあった長細い物に目に留めた。

「お？」

早くも発見かと思いつつ、それを摘まみ上げる。が、それはニッパーではなく、竹トンボとCCDカメラを繋ぎ合わせたオブジェだった。

「確か、未来ガジェット3号機、だっけ？」

うっすらとかぶっているホコリを軽く払い、手の中で回しながらため息をつく。

「このラボの発明品なんだから、ちゃんと管理しなさいよね……」

とはいえ、「空撮ができて風景がグルグル回って実用性皆無」というこの欠陥ガジェットと、その横にある豆電球が嵌まっていない懐中電灯とで、どちらがよりガラクタに近いかと言われれば、短くない議論が必要だろう。

CCDカメラ付き竹トンボを棚にしまい、探索を再開する。

開発室には他にもこのラボの発明品が並んでいた。未来ガジェットはこれまでに八個作られたが、8号機の「電話レンジ(仮)」を例外として、どれも商品的価値はない。その8号機だった、本来の開発目的は「電子レンジを遠隔操作する」という無意味極まりない物で、過去にメー

ルを送る機能は偶然の産物に過ぎない。

そして、それら八個の中でも一番サイズが大きく、一番場所を取り、一番役に立たなそうな未来ガジェットが、今、紅莉栖の目の前にある、7号機だった。

「攻殻機動迷彩ボール……だっけ？」

7号機は球形をしていて、鉄製の骨組みの周囲に十台以上の6型ブラウン管が固定されている。それなりの大きさにも関わらず、床に置いておいても邪魔だと判断されたのか、奥行きのある棚の上段に押し込めてあった。そのさらに上、棚の天板の上にもホコリをかぶった箱やモニタが並んでいた。

紅莉栖は改めて、未来ガジェット7号機を眺めた。

それまでの未来ガジェットと比べると、多少お金のかかった作りをしていた。ブラウン管にはそれぞれ、球体の反対側を映すCCDカメラが接続されていて、ガジェットを起動すると全部のブラウン管にCCDカメラ越しの風景が映し出される。この機構によって、攻殻機動迷彩ボールの姿は周囲の風景に溶け込んで、誰からも見えなく――

「――なるわけないし、なったからって、なんなのよ？」

アニメ映画に出てくるギミックを再現しているそうだが、そもそもなんのために作ったのかさっぱりわからない。

以前、岡部に聞いたこともあったが「世の中には知らない方が良いこともある」「トップシークレットだ」「お前が機関のエージェントではないと証明されるまでは教えられん」と、いつもの調子で返ってきたのでそれ以来聞いてない。

「厨二病乙。どうせ思い付きで作ってみただけなんでしようけど——」
と、その時。

「——ん？」

これまで紅莉栖はこのボールを——興味がなかったの——近くで眺めたことがなかった。だから、ブラウン管を固定する骨組みの内側に、多少の空間があることを今日初めて知った。

その空間に、なにかが置かれていた。紅莉栖は目を凝らす。

「……ノート？」

それはB5のノートだった。全体が微妙にひしゃげている。恐らく、ブラウン管とブラウン管の隙間から、誰かが無理やりねじ込んだのだ。とはいえ、誰が？ なぜ？

居間から届くわずかな光を遮らないように注意しながら、ボールの中をよく覗き込む。ノートの表紙には、マジックでなにやら書かれていた。多分、岡部の文字で。

……なにが書いてあるんだろう？

単に大学の講義を板書しただけの物ではないだろう。もしそうなら、こんな所にねじ込んでおく必要がない。他人に見せたくないから、このノートはここにあるのだ。

好奇心がむくむくと沸き上がり、ノートを取り出してみようと紅莉栖は決める。ニツパールのことはもう忘れた。

「届く、か、な……？」

白衣の袖をまくり、隙間にできる限り手を差し込み、ノートをつまみ出せるか試す。

「いけ、そ、う……」

ギリギリ、人差し指と中指の第一関節くらいまで、ノートの端に届いた。

「……よし」

深呼吸の後、表紙を二本の指の先ではさみ、全力で紙を押さえながら一気に引き抜く。

「とりやつー！」

勢いよく引き抜いた右手の人差し指と中指の間には、確かにノートがはさまっていた。

「よしっ！」

取れたからといってどうというわけでもないが、努力が報われるのは素直嬉しい。

達成感に包まれて恍惚としていた紅莉栖は、しかし、ノートを引き抜いた時のわずかな振動によって、棚の最上段に奇跡的なバランスで積み重なっていた雑誌やPCソフトの空箱やCD-Rのケース群が、徐々に崩れはじめていることに、気づくのが、一瞬、遅れた。

「……え？ あ、やばっ！」

次になにが起きるか予想できた紅莉栖は、瞬時に飛びのいて落下物を避けようとした。が、運悪く、床を這っていたケーブルに足を引っかけ、その場に尻餅をついてしまう。

「いたっ！」

直後、仰向けになった紅莉栖の頭上に、ガラクタの山が降り注いだ。

ガタガタガタバサバサバサゴロゴロゴロ！

「うひゃあああっ！」

哀れ、十七歳でヴィクトル・コンドリヤ大学大学院の博士課程を修了した天才少女は、秋

葉原の片隅でエロゲーの箱とCD-Rの下敷きになってしまった。

「……こんな初歩的なドジをするとは。なにやってんだ、私」

孤独と虚しさに包まれながら、紅莉栖は虚空に向けてため息をついた。

ガチャ。

玄関の扉が開き、まゆりがいつものように笑顔を振りまきながら入ってくる。

「クリスちゃんただいま〜。あれ？ 誰もいないのかな？ 鍵、あいてたんだけどなー」

「ま、まゆり。たす、けて……」

「え？ クリスちゃんっ!?! 大丈夫っ!?!」

まゆりは急いで紅莉栖の上に積み重なったあれやこれやを取り除き、優しく助け起こした。

おかげで、紅莉栖はようやく人間としての尊厳を取り戻すことができた。

「ふう、サンクス、まゆり」

「びっくりしたよ〜。クリスちゃん、なにしてたの?」

「小さいニッパーが欲しかったただけなんだけど……。これが気になって」

手にしていたノート——そもそもこれがなければこんなみじめな思いをしなくて済んだ筈で、正直もう見たくもなかった——を渡す。不思議そうにノートを受けとったまゆりは、表紙に書かれた文字を見た途端、ぱつと笑顔になった。

「わー！ なつかしく！ これ、なくしたと思ってたよー！」

「まゆり、これ知ってるの？」

「うん！ 大切な思い出だよ♪」

まゆりがノートの表紙をこちらに向ける。そこには、下手な文字でこう書かれていた。

「未来ガジェット研究所活動記録（機密）」

■ 未来ガジェット研究所活動記録（機密）

2009年3月（日付は機密情報の為削除されている）日

本日は記念すべきラボの創設日である。たった今ポストに「未来ガジェット研究所」の表札を貼ってきたので間違いない。

部屋には前の利用者が残していった棚やソファ以外はなにもない。

いや、もう一つあった。これは前の利用者の物ではないが。なんだと思う？

ブラウン管テレビだ。小さく。そして無数の。

同型の6型ブラウン管テレビが、少なくとも十個以上置かれている。というか、俺が一階と二階を何往復もして運び上げたのだ。今俺はそのうちの一つに腰掛け、別の一つの上に広げたノートにこれを書いている。しかし、この体勢は長く持ちそうにない。せめて二つ重ねて高さを作ろう。

よし、いい感じだ。

なぜこの物言わぬブラウン管どもを栄えある未来ガジェット研究所の最初の備品にするこ
とになったのかというと、それがこの部屋を借りる条件の一部となったからだ。活動記録の
第一日は、この顛末を語るとしよう……。



その日、俺は秋葉原の不動産屋を回り、春から借りる部屋の候補を漁っていた。

四月から——世を忍ぶ仮の姿として——東京電機大学の大学生となるのだが、実家から毎
日通うには、千代田キャンパスは微妙に遠かった。そして、どうせ部屋を借りるなら秋葉原
にしたかった。秋葉原に秘密研究所を持つマッドサイエンティスト。完璧じゃないか！ 志
を同じくする者が集う溜まり場としても地理的に好都合だ。

白衣を着て外を歩いたのもこの日が初めてだった。マッドサイエンティストと言えば白衣
がユニフォームだ。正直目立つかとも思ったが、秋葉原という普通ではない空間ゆえか、意
外にも奇異な目で見られることはなかった。それはそれで寂しくもあるが、活動しやすいの

は助かる。

しかしまあ、ある程度想定してはいたが、秋葉原の物件はどこも高かった。親の援助は期待できないので、自分のバイト代で賄えない家賃では話にならない。

結局午前中の不動産屋巡りは空振りに終わった。俺はサンボで昼飯を済ませ、パーツショップが並ぶ路地を末広町方面にブラブラと歩いていた。

秋葉原に研究拠点を置くプランは既に諦めつつあった。そうでなくてもバイト代は研究資金に充てたいし。大学生活が安定してから改めてラボ設立計画を立てるかと考えはじめていた。

と、その時。

俺はこの秋葉原という普通ではない空間においても、かなり珍しい光景に出くわした。

「……なんだ、あれ？」

それは、アスファルトの上にそびえたつ、ブラウン管テレビの山だった。

同じメーカーのブラウン管が十個以上あり、乱雑に積み重なっていた。持ち運び用の持ち手が付いた小型の物だが、これだけの数があると謎の雰囲気醸し出してくる。

見れば、すぐ傍に灰色のバンが停まっっていて、後ろのドアが開いていた。恐らくブラウン管はこのバンから荷下ろしされた物なのだろう。

運転手の姿はなかった。店にでも入ったのかと、バンが寄せてある方の雑居ビルを見上げて、そこでようやく合点がいった。

ビルの一階はショップになっていて、控えめに「ブラウン管工房」と書かれていた。ブラウン管も時代遅れになりつつある中、いまだこんな専門店があるとは。さすがは秋葉原だ。

唐突に、俺の脳内でニューロンがスパークした。むき出しのブラウン管って、マッドサイエントイストぽいんじゃないか？ それが無限に砂嵐を映していたら最高だ。

気づいた時にはもう店内に足を踏み入れていた。中は薄暗く、大小様々な種類のブラウン管が、売るつもりがあるとは思えないレイアウトで壁を埋め尽くしていた。古き良き秋葉原の混沌がそこにはあった。

しかし、雰囲気を楽しんでいる余裕は、残念ながら存在しなかった。なぜなら、その時、ブラウン管工房店内では、大変な事件が巻き起こっていたからだ。

——To Be Continued!

続きはパッケージ版「STEINS;GATE ダイバージェンシズ アソート」で!

Nintendo Switch™ 用ソフト



There is no end though there is a start in space. -- Infinity.It has own power, it ruins, and it goes though there is a start also in the star. ---Finite.
Only the person who was wisdom can read the most foolish one from the history.The fish that lives in the sea doesn't know the world in the land. It also ruins and goes if they have wisdom.
It is funnier that man exceeds the speed of light than fish start living in the land.It can be said that this is an final ultimatum from the god to the people who can fight.



2019.3.20 ON SALE

